知的

3.7

明:

自然界における 々な事 は神の存在を 明するという概念、またいかにダ ウィンの 化 と「Irreducible complexity（ 元不能な　性）」が相容れないかについて。

目: 事イスラ ムの真 性を示す数々の　神の存在

より: A.O.

日: 11 Oct 2010

集日: 11 Oct 2010

まず始めに、アスピリン について考察してみましょう。その中央にはマ クがつけられています。このマ クは半分だけの服用をしたい人に向けて付けられています。私たちの周りにあるすべての 品には、アスピリン ほど　なものではありませんが、一定の　が施されているのです。それには私たちが　へ向かうために　する自　から、テレビのリモコンまで、あらゆるものが含まれます。

“　”とは、共通する目的に向けて 々な部品の 和の取れた み立てをすることです。この定 に うと、自　が　されたものであるということは容易に予 することが出来ます。なぜなら、そこには人々や物 の 送という特定の目的があるからです。この目的の 成のために、エンジン、タイヤ、ボディ などの部品が工 にて　された上、 み立てられるのです。

しかし、生き物に してはどうでしょうか?　やその 行力学は　されることが可能でしょうか? その答えを出す前に、自　の例で用いた 定法を再び使ってみましょう。この 合、目的は ぶことになります。この目的のために、 くて上部な骨格、そしてそれらを かす　な筋肉が、 翼と相互に 能することによって空に舞い上がることが可能となるのです。 翼は空 力学的に完璧な形成をしており、 の必要とする多大な量のエネルギ が身体の代　能と 和しているのです。 という生き物は、ある特定の　による 物であることは明 です。

　以外の生き物が　されたとしても、同じ事 が得られるでしょう。全ての生物には、特定の 密な　が施されているとことが例 されます。そしてこの　を めれば めるほど、私たちも同 にこの特定の　の一部であることが判明するのです。このペ ジをめくるあなたの手は、いかなるロボットにも搭 不可能な 能性が えられています。この行を むあなたの目は、いかなるカメラにも模 することの出来ない焦点をもって、その　を　しているのです。

こうして、重要な　が かれます。つまり、私たちを含む自然界のあらゆる生物は　されているということです。これは、自然界を支配し、完全なる力と英知を秘めた、あらゆる生物の　を意のままとする 造主の存在を示しているのです。

しかしながらこの真 は、19世 中 に形成された 化 によって否定されています。この理 とはチャ ルズ ダ ウィンによる『 の起源』によるものであり、あらゆる生物は突然　を り返す　的な偶然によって 化したと断言します。

この理 の主 する原理によれば、あらゆる生物は微小で偶然的な 化の 程を通 するとされます。これらの偶然的 化が子 にも受け がれ、生物にとって他者に する有利な 化をもたらすというのです。

このシナリオは、あたかも非常に科学的であり、 得力のあるものとして、 去140年 に渡って められてきました。しかし、より大きな焦点と 密な　によって知的　 と比 されたのであれば、ダ ウィンの 化 とは非常に った が えてきます。つまり、ダ ウィンによる 造 についての 明は、自己矛盾の 循 に ぎないということです。

まずは、“偶然的 化”に注目してみましょう。ダ ウィンは当 の　子学的知 の欠如から、それに しての包括的な定 を提供することが出来ませんでした。彼を信奉する 化 者たちはこの件に し、突然　という新しい概念を打ち出しました。突然　とは、生物の有する　子の恣意的な断 、欠落、または 移のことを指します。しかし最も重要な点は、突然　によって生物の　情 とその状 が改善されたという例が、 史上において一度も存在していないことです。ほぼ全ての突然　例は、その 体を不具にするか、危害をもたらしているのであり、それ以外は中性的な影 しか与えていません。それゆえ突然　によって生物が 化するという考えは、群集の中に 丸を打ち み、　の 果によってより健康で 化した 体が 生する、と主 することとなんら わりないのです。これは明らかにナンセンスなことです。

たとえ科学的デ タに反し、ある特定の突然　体が自らの状 を改善できたのであっても、ダ ウィンの 化 は依然として崩 を免れることが出来ません。その理由は、“Irreducible complexity（ 元不能な　性）”という概念にあります。

この概念の要旨はこうです：生物の　や器官の大半は、 々な独立した部位による相互的な きの 果によって 能しているために、それらの内の一部であっても除去または 力化されたのであれば、　や器官の全体が不具になるというものです。

たとえば、耳が音を知 することが出来るのは、小さな 器官から なる　反 によってのみです。これらの一つでも取り除かれるか、 形されてしまうと（たとえば耳小骨の一部が欠 したりすると）、　は完全に失われてしまうのです。耳が　器官として 能するためには、耳垢、槌骨、砧骨、 骨、鼓膜、 牛とリンパ液が、それぞれ知　胞と音の振 を神 に える造を て、 神 が につながった上で、 の　を司る部分が例外なくすべて一 に 能しなければならないのです。

こうしたシステムは、各々が部分的に 能し得ないため、部分的な　をしたということはあり得ません。

それゆえ、 元不能な　性という概念は、 化 をその根 から破 するものなのです。非常に 味深いこととしては、ダ ウィン自身もまさにこの展望について 念を示していたことです。彼は『 の起源』のなかでこのように しています:

“微 な 化の　による　な器官の形成の不可能性がいつしか 明されるのであれば、私の理 はいなく破 するであろう。しかしながら、私はそういった器官を つけ出すことが出来なかったのである　”（チャ ルズ ダ ウィン、 の起源、 写初版、ハ バ ド大学出版、1964年、189 ）

ダ ウィンは19世 の未熟な段 の科学において、そういった器官を つけ出すことが出来なかったか、あるいは つけ出したくなかったのかもしれません。しかし、20世 の科学では自然科学の　にまで研究が み、生体　の大半は“ 元不能な　性”を具 化しているのです。それゆえダ ウィンの理 は、彼が恐れたように“いなく破 ”しているのです。

生物というものを考察すると、ダ ウィン理 の多大なる　いを　することだけでなく、これら 造されたシステムの 大なる英知を目にすることが出来ます。これらのメカニズムは、 の翼からコウモリの　骨の内部に渡るまで、あらゆるところから 出すことが出来ます。それゆえ、私たちは神の 造の明白な　を て取るのです。同 に、 造における 失なき神の力と能力は、以下のクルア ンの章句によって表 されています。

“??”??????59:24?

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/301

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。